

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 7 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520821

研究課題名（和文） 東アジアにおける家族写真の歴史民俗学的研究

研究課題名（英文） The Historical and Folkloric Study of Family Photographs in East Asia

研究代表者

川村 邦光 (KAWAMURA KUNIMITSU)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：30214696

研究成果の概要（和文）：日本の家族写真は 1860 年代の後半、幕末期に写真術が西洋から導入され、西洋の家族写真の直接的な影響を受けてきたが、独自の展開も見せていることを明らかにした。写真の構図・コンポジションにおいて、西洋風の家長を中心とする家父長制型家族写真が撮られてきたが、老齢の祖父母を中心として、儒教的な孝養・敬老の倫理を表象する儒教的孝養型家族写真が多く見られ、家族写真の主流を占めている。それは中国・台湾や韓国でも同様であり、東アジアの家族写真の大きな特徴として位置づけることができる。

研究成果の概要（英文）：In this study I explained that family photographs in Japan were directly influenced by Western family photographs of the Western photographic technique which were introduced into Japan from West in the latter half of 1860's but developed unique styles. In Japan, the composition of family photographs have been constituted in the Western paterfamilias style, but on the other hand they have been constituted in the Confucian style which attached much importance to the spirit of piety, which have been the main current of family photographs in Japan. Its current is the same in China and Taiwan, Korea, so family photographs of the Confucian style are the distinctive feature in East Asia.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学C

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：家族写真 写真館 写真師 肖像写真 民俗学 文化人類学

1. 研究開始当初の背景

科研「家族写真の歴史民俗学的研究」（課題番号：18320141）で、日本の家族写真の歴史的な展開に関して、人生儀礼や年中行

事などの民俗と関連させて研究した。そして、家族写真が民俗学や歴史学の貴重な資料となることを明らかにした。この研究を発展させることによって、さらなる家族写

真に関する歴史民俗学的研究を深めることができると考えた。家族写真の研究領域を中国・台湾や韓国の東アジアへと拡大して、日本の家族写真と比較研究することによって、比較民俗学や文化人類学の領域において独創的な局面を切り開くことができる。

2. 研究の目的

(1)本研究では、かつて“外地”だった中国・台湾や韓国において、写真やカメラがどのような経路で、どのように受容され普及していったのか、写真館がいつ誰によって設立されたのか、いわば“写真の社会史”を明らかにする。

(2)この“外地”の戦前から戦後に至る、家族写真や写真集をできるだけ収集することを目指す。そして、家族写真がいつどのような機会に、どのような目的で撮影され、どのように意義づけられているのか、家族メンバーの配置(コンポジション)やポーズにどのような文化的・宗教的な観念・意識が表出されているのかに関して調査し分析して、“家族写真の文化史”を探究し、家族において家族写真のもつ文化的意義を明らかにする。

(3)“外地”の家族写真にどのような場面や光景が写されているのか、特に人生儀礼・人生の節目とどのような関わりをもっているのか、家族写真の撮影がどのようにして民俗的な慣行として形成されていったのか、“内地”の家族写真と対照させながら“家族写真の民俗史”を探究していく。それとともに、戦前・戦中と戦後に、家族写真の場面や家族メンバーの配置・ポーズ、撮影機会がどのように変化していったのか、“家族写真の現在”を明らかにすることを目指す。

3. 研究の方法

(1)本研究では、戦前・戦中・戦後を一応の時代区分として、家族メンバーで写真撮

影をする機会と考えられる、人生儀礼や年中行事、特に戦争期に関する、家族写真や家庭アルバムに関する調査を行なう。その際には、被写体にまつわる話をうかがい、撮影者が写真師か家族メンバー・近親者かに留意しつつ、聞き取り調査を行なう。また、中国・台湾や韓国で、写真技術がどのような経路で導入され、普及していったのか、写真館がいつ頃から経営されるに至ったのか、写真撮影の機会にどのような階層差があったのか、カメラや写真撮影の大衆化がいつ頃から始まったのかといった点に関して、文献調査を行なう。

(2)以上の調査・研究に基づいて、中国・台湾・韓国の家族写真において、家族メンバーの構成や人生儀礼・年中行事がどのように変化し展開していったのか、日本の家族写真と対照させながら、文献資料を踏まえて、分析・考察を行なう。また、各年度末には、計画の問題点を検討し、次年度の計画に組み込んで、研究計画の遂行を期す。

4. 研究成果

(1)本研究は、これまで写真研究がおもに美術史において西洋の写真史との関連で研究されていたのに対して、中国・台湾・韓国の東アジアを射程に入れた、初めての研究であると考えられる。東アジアでの写真・カメラの導入においては、西洋化・近代化、何よりも植民地化の歴史的プロセスが大きく関わっていることが明らかになった。そして、家族写真における家族メンバーの配置(コンポジション)では、親への孝養、長幼の序、男女の別という儒教的な倫理が写真撮影の導入期から支配的であり、儒教的孝養型家族写真が家族写真スタイルとして展開していったことが東アジアの家族写真の大きな特徴である。

(2)東アジアの家族写真が西洋のその影響を濃厚に受けてきたことは確かだが、独自の家族写真スタイルの展開があった。

その一方で、家父長制の近代家族の進展とともに、家父長制型家族写真も、儒教的孝養型家族写真に並行して、大きな位置を占めていくようになる。家長である父親(夫)を中心にして、両脇に母親(妻)と子供が並んでいる構図、それは「エディプスの三角形」と呼ばれ、家父長制型家族写真の典型である。家長の父親(夫)が母親(妻)と子供を庇護・監督するという、近代家族のイデオロギーがそこには表象されている。この家父長制型家族写真の受容・普及が西洋化・近代化の指標となる。

(3)台湾で写真撮影が広まっていったのは、1895年の日本帝国による台湾の領有・植民地化の以降である。台湾総督府は植民地の支配・統制のために、記録写真を撮影し、また植民地化の成果を宣伝するために、植民地台湾の光景を撮影して報道した。1900年代の初めに、台湾人が日本の写真学校に留学し、写真術の習得に励んでいる。1920年代になると、台湾人の経営する写真館が現われ、写真撮影が普及していくことになる。

台湾の早期の家族写真は、大陸中国から伝来した先祖祭祀に用いる肖像画の伝統を継承している。先祖肖像画は祠堂や正庁に掲げられ、子孫に礼拝されている。子孫が父母・先祖の葬祭を手厚く行なうという、儒教における「慎終追遠」の孝道が先祖肖像画には表象されている。先祖は正坐または椅坐して、正面を向き、面相学に基づいて、理想的な容貌を描くことが望ましいとされ、卓上に縁起物である花を生けた花瓶が置かれ、先祖の身边に寄り添った童子が描かれ、子孫繁栄や富貴・長命を表象したものが好まれている。台湾の家族写真は、この先祖肖像画の伝統をそのまま受け継いで、儒教的孝養型家族写真が撮られ、今日に至っている(林曉淳「台湾の家庭アルバムにおける記憶と語り」『日本学報』大阪大学文学研究科日本学研究室、30号、2

011年、参照)。

(4)朝鮮では、1883年に金備元が写真館を開設している。また、その前後に、日本人が写真館を開設したとされている。1907年、朝鮮写真史に大きな足跡を残した、金圭鎮の天然堂写真館がソウルに開設された。1910年代以降、朝鮮人の経営する写真館が増えていき、朝鮮全土に写真が普及し、家族写真も多く撮影されていくことになる(ハンミ写真美術館編『わが写真史を開く』成惠珍・崔嘉珍訳、ハンミ写真美術館、2013年〔原本刊行、2006年〕、参照)。朝鮮・韓国では、台湾と同じような、卓上に縁起物である花を生けた花瓶を置いた、儒教的孝養型家族写真が主流をなしている。(5)近年、台湾と韓国では、きわめて豪華な結婚写真アルバムの作成が隆盛して、写真館の一大事業にもなっている。また、大きく引き伸ばされた結婚写真は、家庭内に飾られている。それは家族写真の現状とも関わり、日本とは大いに異なっている。とりわけ韓国では、ホームドラマに家族写真が頻繁に現われている。家屋の居間に額入りの家族写真が飾られ、また個室にはやや小さめの家族写真が飾られている。それは会社などのオフィスの机の上に家族写真を飾っている欧米のプライベートなものをパブリックな空間に持ち込んでいるのと同じような状況だと考えられるが、韓国ではそれを凌駕しているとすら思われる。韓国では、財布に小さな家族写真、携帯型家族写真を入れて持ち歩いている人がきわめて多いのである。

日本でも、携帯電話やスマートホンに家族写真を入れて人はいるにはいるが、数少ない。家庭内に家族写真を飾っている人も少ない。日本の家族写真において、大きな特徴となっているのは、家族写真年賀状である。年一辺、家族写真を年賀状に貼り付けて、友人・知人たちに送りつけている。家族の絆の健在な“幸せそうな家庭”を演

出しているのである。近代家族の維持・存続の媒体として、家族写真が有効な機能を果たしてきたことは確かだ。日本では核家族の解体の危機を糊塗する媒体として、台湾や韓国では核家族内に閉じ籠り、維持・存続を表現する媒体として、家族写真は他者に対する自己表象となっていると言えることができる。

(6)研究成果報告書として、『文化/批評』冬季臨時増刊号(2013年1月刊行)に「特集：東アジアの家族写真の展開と表象」と題して、以下の論文を掲載した。

- ・川村邦光「特集にあたって：「東アジアの家族写真の展開と表象」へ向けて」
- ・川村邦光「家族写真スタイルの展開と表象」
- ・小山有子「華族の家族写真——『華族画報』から」
- ・鳥集あすか「忘れられた記憶 残された記憶——写真に見る秋葉神社とその家族」
- ・竹原直道「遺棄されたアルバムのなかの家族写真——それは崩壊する家族の表象なのか」
- ・林曉淳「台湾の家庭アルバムの様相に関する考察」
- ・本多彩「写しだされた日系人の諸相——公と私の写真」
- ・川越道子「戦争とアルバム——在日ベトナム人1世の家族写真より」
- ・西井麻里奈「「聖地」・慰霊碑・クリアランス——広島戦後史再考」
- ・ハンミ写真美術館編『わが写真史を開く』成恵珍・崔嘉珍訳

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6件)

①川村邦光、「救世主幻想のゆくえ：皇道大本とファシズム運動」、竹沢尚一郎編『宗教とファシズム』、水声社、23-62、2010

年、査読無

②川村邦光、「東北のおばあたちの物語の発声現場」、鎌田東二編『遠野物語と源氏物語』、創元社、89-98、2011年、査読無

③川村邦光、「戦死者のゆくえ」、野上元・福間良明編『戦争社会学ブックガイド』、創元社、262-264、2012年、査読無

④川村邦光、「四国遍路の途上にて」、『日本オーラルヒストリー研究』、8号、17-30、2012年、査読有

⑤川村邦光、「災厄と弔いをめぐる断想：遺影・家族写真と弔いの形」、『治療の聲』、17号、13-20、2012年、査読無

⑥川村邦光、「家族写真スタイルの展開と表象」、『文化/批評』冬季臨時増刊号、11-39、2013年、査読無

[学会発表] (計 3件)

①川村邦光、「皇道大本とファシズム運動を巡って」、日本宗教学会、2010年9月4日、東洋大学

②川村邦光、「日本の家族写真の表象」、The 2nd International Conference of Humanities Research on Emotion “Family and Emotion: Love, Image, and Desire”、2011年6月17日、全南大学校

③川村邦光、「遍路における生と死」、日本オーラルヒストリー学会、2011年9月11日、松山大学

④川村邦光、「家族写真の展開と表象をめぐって」、日本教育社会学会、2012年10月28日、同志社大学

[図書] (計 2件)

①川村邦光、『写真で読むニッポンの光景』、青弓社、216、2010年

②川村邦光、『弔い論』、青弓社、356、2013年

6. 研究組織

(1)研究代表者

川村 邦光 (KAWAMURA KUNIMITSU)
大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：30214696

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし